

# ミャンマー人日本語学習者の現場指示詞の使用状況の試み

—会話能力の育成を目指して—

インモウテツ（岡山大学）

キーワード：現場指示、使用状況、人称区分説、距離区分説、理解度

## 1. 指示詞

### 1. 1 日本語の指示詞

状況に依存して物や場所を指し示す語である指示詞は世界の殆どの言語に存在する。日本語の指示詞はコ・ソ・アの三系列からなっている。指示詞には現場指示用法（以下、現場指示）、文脈指示用法（以下、文脈指示）と記憶指示用法（以下、記憶指示）が存在する。

直接目で見えるもの或いは実際に現場に存在するものを指し示す用法は現場指示と呼ばれている。指示詞の使い分けの説明として人称区分説と距離区分説がある。人称区分説とは、堤（2012）では、話し手の領域に存在する対象を指し示すときはコ、聞き手の領域に存在するものを指し示すときはソ、話し手・聞き手どちらの領域でもない領域に存在するものを指し示すときはアを使用するという人称に関連づけをして説明されている。一方、距離区分説とは、話者の近くにある対象を指し示すときはコ、話者から遠くにある対象を指し示すときはア、話者から遠からず近からず対象を指し示すときはソ、という話者からの距離感で指示詞を使い分ける用法である。

現場指示に対し、会話の中若しくは文章中の話題を指し示す用法は文脈指示と呼ばれている。文脈指示には他の用法と明らかに異質な用法や問題が存在し、その問題を解決しようとした研究が多数行われ、主な研究者として、久野（1973）、黒田（1992）金水・田窪（1992）などが挙げられる。

また、記憶指示とは、「話し手・聞き手双方の記憶の中に存在する出来事や事物を指示する（吉本1992）ものであり、ア系列指示詞には文脈指示用法が存在しておらず、多くの先行研究では「話し手と聞き手の両方が知っている対象を意味する」と説明されている。

上記で記述した日本語の指示詞は、日本語教育においても初級前半の早い段階で教えられる。初級文法項目であるため、習得はさほど容易なことではない。中・上級になっても学習者の指示詞の使用に誤用や不自然なことがよく見られる。ミャンマー人の学習者にとって何が問題であるか調べる必要があると考えられる。

### 1. 2 ミャンマー語の指示詞

ミャンマー語の指示詞の種類を整理してみると、日本語には近称・中称・遠称のコ・ソ・アの三系列あるのに対し、ミャンマー語には研究者により、近称の「dī」と遠称の「hō」の二系列であるという説明と、近称の「dī」、中称の「hō」と遠称の「h'oka」の三系列であるという説明があり、意見が分かれている。ミャンマー語の指示詞の先行研究を調べると、ミャンマー語で書かれた先行研究は指示代名詞（主に、人代名詞）について書かれたもののみにとどまっている。日本語で書かれた先行研究にも、上記と同様に意見が見られ、研究者によってミャンマー語の指示詞は二系列と三系列に分かれ、研究されている。文脈指示や記憶指示に関する先行研究はまだないようである。そのため、ミャンマー語と日本語のズレは、日本語を学習する際の妨げになる可能性があるのではないかとと思われる。

それで、ミャンマー人がミャンマー語の指示詞をどのように理解しているのか、また、日本語を学習

する際、両言語の違いをどのように解釈して受け入れているのか、学習者の理解で、正確な指示詞を用いてコミュニケーションができるか否かについて考察したい。指示詞の体系を始め、意味用法まで様々な面にわたって行う対象研究が望ましいが、今回は現場指示を中心に研究することに決めた。

現場指示の研究に先立ち、ミャンマー人が日常生活で使用するミャンマー語の現場指示詞を意識して考察したところ、日本語のコと同じ意味の「dī」、日本語のソと同じ意味の「hō」と「'edī」、日本語のアと同じ意味の「h'oka」の4つに分かれていることに気づいた。ミャンマー人は無意識のうちに、4つの現場指示詞を使用し、身の回りの物や場所を指し示している。そのため、日本語を使用して物や場所を指し示すときどのように使い分けているのか調べる前に、ミャンマー語の指示詞の理解度を調べる調査を行なった。

### 1. 3 調査概要

今回の研究で、学習者が指示詞を学習する際に、本来簡単に習得できる基本的な用法でありながら、誤用の多い現場指示詞から調べることにした。8枚のイラスト<sup>1)</sup>を用意し、一般のミャンマー人400名を対象に調査を行った。その8枚のイラストに日本語訳を付け、日本語ができるミャンマー人400名に対して調査を行い、分析・考察した。今回の調査では8枚のイラストを使用した<sup>2)</sup>が、データ分析は4枚(1、3、7、8)に絞り、以下のように分析結果をまとめた。結果のまとめを記述する際、ミャンマー語にはソに相当する言葉が2つになっているため、「ソ1」と「ソ2」と記述する。

### 2. 結果と考察

回答した調査参加者のデータをまとめ、以下のように分析した。表<1>から表<4>は、現場指示詞が使えそうな場面を設定し、同じ資料を二回に分けて調査を行なった。最初に、ミャンマー語で書いた文章の中から最も適切な答えを選択するように指示し、回答を得た。一ヶ月後に、同じイラストの文章を日本語に訳し、コ・ソ・アの中から適切な答えを選択するよう指示した。この二つの調査結果を比較すると以下ようになる。回答(M)は、ミャンマー語で答えた被験者の回答で、回答(J)は、日本語で答えた被験者の回答を意味し、数字は回答率をパーセンテージで示したものである。

<表1> イラスト(1)の結果

指差した商品	A				B				C				D				E			
回答(M)	91.7	0.5	7.8	0	1.8	80.7	14.1	3.5	0.5	41.7	50.0	7.8	0.3	11.6	8.3	79.9	1.0	31.4	18.6	99.0
回答(J)	99.7	4.5	1.8	3.3	73.9	22.9	0.5	54.8	44.7	0.0	10.6	89.4	1.0	32.9	86.1					

<表1>のデータの扱い方を見ると、ミャンマー語の現場指示詞は、コ・ソ1・ソ2・アの四系列であるため、選択肢が4つあるのに対し、日本語は三系列であり、選択肢を3つとした。更に分析を続けると、ミャンマー語のソ1とソ2は、日本語のソ系列と同じ働きをすることが判明された。イラスト(1)は、ぬいぐるみの店舗で顧客と店員が対面して、買いたいものを指差している場面である。表<1>の回答を見ればわかるように日本語とミャンマー語の答えは、ほぼ同様の結果が得られた。

<表2> イラスト(3)の結果

示した番号	A				B				C				D				E			
回答(M)	89.9	1.3	8.8	0.0	11.1	14.6	74.1	0.3	74.1	4.8	20.9	0.3	0.5	67.8	24.9	6.8	1.0	19.6	18.8	60.3
回答(J)	95.2	1.5	3.3	3.3	5.8	52.0	42.2	40.7	47.5	11.8	1.0	63.3	35.7	0.3	12.8	86.9				

<表3> イラスト(7)の結果

示した番号	A			B			C			D						
回答(M)	88.2	1.3	0.3	0.0	20.6	88.3	7.3	3.5	1.3	23.1	74.1	1.3	0.8	12.6	4.5	81.7
回答(J)	97.7	1.8		0.5	25.9	65.6		8.5	1.8	71.6		26.6	0.0	8.0		92.0

<表4> イラスト(8)の結果

示した番号	A			B			C			D						
回答(M)	98.2	1.0	0.5	0.3	25.4	58.5	11.6	4.5	2.8	55.8	40.2	1.0	1.5	9.3	35.4	53.8
回答(J)	98.2	2.8		1.0	25.6	62.8		11.6	2.0	66.1		31.9	3.0	24.1		79.9

<表2><表3><表4>の結果も同様に、表<2>の(C)の回答以外は回答(M)と(J)の回答率が同一であるのが見られた。原因は2つ考えられる。1つは、同じ内容の調査を先にミャンマー語で受けたため、日本語で考える際ミャンマー語の影響を受けている可能性もある。もう1つは、日本語の指示詞の考え方が定着していないことも考えられる。母語の影響の面から考えると、参加者の中には日本語ができないミャンマー人もいるため、その可能性は低い。日本語学習者にとって、指示詞がまだ定着していない可能性が高いため、その点を中心に再度調査を行なった。予想通りの調査結果が出たため、今回は、指示詞を使用した会話テストを実施する準備を行なった。文法構造の習得が会話能力の向上を助けるため、早い段階から会話練習を工夫することが教育上大切である。

### 3. 会話能力に繋げる試み

上記の結果を元に、ヤンゴン外国語大学日本語学科の初級日本語学習者150名に現場指示の授業を3回行なった。教科書に載っている内容を中心に、調査の内容と違う例文を数多く使用し、学習者自身が理解するまで時間をかけて授業を行なった。授業後、一週間経った日に、前回と同様の調査資料を用い、再度回答を得た。結果、前回と違う結果が見られた。その結果とまとめると以下のようになる。

<表5> イラスト(1)の結果

示した番号	A			B			C			D			E							
回答(M)	91.7	0.5	7.8	0	1.8	80.7	14.1	3.5	0.5	41.7	50.0	7.8	0.3	11.6	8.3	79.9	1.0	31.4	18.6	49.0
回答(J)	85.3	14.7		0.0	0.0	7.7	92.3	0.0	9.2	90.8	0.0	9.3	90.7	0.0	75.8		24.2			

<表6> イラスト(3)の結果

示した番号	A			B			C			D			E							
回答(M)	89.9	1.3	8.8	0.0	11.1	14.6	74.1	0.3	74.1	4.8	20.9	0.3	0.5	67.8	24.9	6.8	1.0	19.6	18.8	60.3
回答(J)	100	0.0		0.0	0.0	97.8	2.2	36.4	43.6	0.0	0.0	23.6	76.4	0.0	44.8		55.2			

<表7> イラスト(7)の結果

示した番号	A			B			C			D						
回答(M)	88.2	1.3	0.3	0.0	20.6	88.3	7.3	3.5	1.3	23.1	74.1	1.3	0.8	12.6	4.5	81.7
回答(J)	100	0.0		0.0	83.2	16.8		0.0	0.0	82.9		17.1	0.0	7.2		82.8

<表8> イラスト（8）の結果

示した番号	A			B			C			D						
回答 (M)	88.2	1.0	0.5	0.3	25.4	88.5	11.6	4.5	2.8	55.8	40.2	1.0	1.5	9.3	35.4	43.8
回答 (J)	100	0.0		0.0	84.6	15.4		0.0	0.0	13.9		86.1	0.0	90.0		100

〈表5〉から〈表8〉までの結果をまとめると、以下のようになる。

- (1) 話し手の領域にあるものは「コ」、聞き手の領域にあるものは「ソ」、話して・聞き手のどちらの領域でもないものは「ア」で指し示す傾向が強い。それは、イラスト（1）の結果である〈表5〉を見てわかる。
- (2) 対象物の位置場所が同じであっても、聞き手の存在する位置により、違う指示詞が使用されるようになったことは、イラスト（7）と（8）の結果をまとめた〈表7〉と〈表8〉からわかる。
- (3) 話し手の領域にあるものは幾つであっても「コ」のみが利用される。それは、前回の日本語での結果及びミャンマー語での結果と明らかに違う点であり、今回の結果にミャンマー語の影響がないことが言える結果になる。
- (4) イラスト（3）の結果をまとめた〈表6〉からは、対象番号Cの回答「コ」と「ソ」が56.4と43.6になっており、原因を調べる必要があると思われる。
- (5) 同じイラスト（3）の結果で、対象番号Eの回答が「ソ」と「ア」に別れており、検討する必要がある。今回の調査結果を検討する際、ネイティブの回答を参考にしたが、今後はネイティブの数を増やす方法も考えられる。

### 3. 結論

上記の結果は、学習者の日本語指示詞への理解度を調査したものであり、1回目と2回目の調査に違う結果が見られた。しかし、信頼性・妥当性のある結果にするためには継続的な研究が望ましい。今回の結果から判断することは難しいが、今回から言えることは、教科書に載っている文法を学習する際、それらをコミュニケーション能力に繋げるように育成することである。教科書の項目は一度教えて終わるものではなく、適切なタイミングでの復習が必要であることを示している。

今後は、2回目の調査に参加した学習者150名に口頭試験を実施し、結果を分析し、ミャンマーの日本語教育に貢献できる研究を目指している。

#### 注

- 1) 現場指示を描き、ミャンマー語の四つの言葉から選ぶタイプのイラスト
- 2) (2、4、5、6) は会話の形になっており、文脈指示と混乱する可能性があるため今回は分析対象外にする。

#### 参考文献

- 吉本啓（1992）「日本語の指示詞コソアの体系」『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房 105-122
- 金水・田窪（1992）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房 123-149
- 久野暉（1973）『日本文法研究』大修館書店
- 黒田成幸（1992）「(コ)・ソ・アについて」『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房 91-104
- 堤良一(2012)『現代日本語指示詞の総合研究』ココ出版